

教育目標		やさしく かしく すこやかに——命を大切に・人を大切に・物を大切に——					
重点目標		(1) 基本的な人権が尊重される教育の推進 (2) 一人ひとりのニーズを把握し、適切な教育支援を行う「特別支援教育」の推進 (3) わかる授業の創造による、生きてはたらく学力の育成 (4) 心ふれあう仲間づくり (5) 基本的な生活習慣を身につけさせる (6) 心を育てる美しい環境づくり (7) 命を守る安全教育の推進 (8) 健やかな体づくり					
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価(案)	成果と課題(案)	改善策(案)	学校関係者評価
基礎・基本の徹底と、授業改善	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的、基本的な知識・技能を習得する。 授業力の向上と授業改善をめざして、職員研修を定期的実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 週5回、10～15分間の朝学習を活用し、漢字と計算練習を行う。 単元ごとのテストから児童の苦手手を把握して個別指導で補う。 兵庫型教科担任制やチームティーチングできめ細やかな個に応じた指導で学力向上を図る。 すべての教員が年1回以上の公開授業を行う。 研究推進委員会や学力向上委員会を中心に全職員で学力向上に向けて授業の改善を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 朝学習を児童に定着させる。 漢字10問テストでは正答率が90%以上になる。 めあてに対し、児童が振り返りをする。 単元テストでは正答率が80%以上になる。 児童アンケートにおいて「授業はわかりやすく教えてくれる」の肯定的回答率が90%以上になる。 改善点を話し合い、事後研で成果と課題をまとめる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 漢字や計算などの基礎学力向上を意識し、各クラスに合わせた朝学習を実施することができた。漢字テストの正答率は89%であった。 めあてを明示してから学習に取り組むことは全学年で実施できた。 単元テストの正答率は77%であった。児童の実態をつかむための問題を活用し、苦手克服に努めた。 児童アンケートの肯定的な意見は85%であった。 研究授業を行い、事後研で成果と課題をまとめることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も基礎学力の向上と苦手手の克服を目的として朝学習を継続的に行っていく。 めあてと振り返りは見通しをもって主体的に学習活動に参加する上で有効な手立てなので今後も継続していく。今年度実施した実力テストで把握した苦手な課題を意識して既習事項の定着を図っていく必要があるため、今後も授業改善や放課後学習を行っていく。 児童が達成感を味わえる授業改善を全職員で取り組む。さらに児童の実態にあった授業内容・方法の検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 下位層の児童を取り残さず、すべての児童に基礎学力を身につけるために、学校全体として取り組みを徹底してほしい。 学習規律や学びに向かう姿勢を身につけていくことが学力の向上につながると考える。 教員の授業力向上、授業改善のため、研究・研修の充実に取り組んでほしい。 家庭学習強化週間など、家庭と連携した取り組みがされている。家庭での学習習慣の定着のためには、家庭との連携は不可欠である。
	学力の向上	<ul style="list-style-type: none"> 思考力・判断力・表現力を育てる授業を展開する。 作文活動を充実させ表現力の育成を図る。 読書活動を充実させ読書力の習得を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを自身の言葉で伝えたり、友だちの考えを聞いて考えをまとめたりする活動を授業に取り入れる。 話し合い活動やペア学習などの児童同士の関わりを活用して、コミュニケーション力の向上を図る。 国語科においてまとめの感想文を書く活動を行い、書き方を指導する。 行事や社会見学などのために新聞を書く活動を行う、書き方を指導する。 週1回の図書の時間、業間での本の貸し出しや、児童や教師の読み聞かせを行い読書意欲の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 話し合い活動、ペア学習をする中で、児童同士が互いの関わりの中で、コミュニケーションをとり、考えを深めることができる。 まとめの感想文・新聞では、授業者がつかませたい内容を書ける児童が80%以上いる。 単元テストの記述問題で自分の考えを書いている児童が80%以上いる。 1ヶ月の読書目標8冊を達成する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学年に応じて取り組み方を工夫し、効果的な場面では話し合い活動やペア学習を取り入れた授業づくりをすることができた。ホワイトボードなどにグループで意見をまとめる過程で児童同士が互いに考えを深めることができていた。 まとめの感想文・新聞では79%の児童がつかませたい内容について書くことができていた。1年生は書くことの基礎作りとして視写を積極的に行った。 単元テスト記述問題では92%の児童が自分の考えを書くことができていた。 読書量は5月～1月の1人当たりの月平均は9.2冊だった。スタンプラリーやチャレンジ読書、先生の本紹介など様々な啓発活動を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童個人の学習を保証した上で、児童同士の関わり合いを今後も取り入れる。有効であった話し合いの手法については研修会などで共有し、話し合い活動やペア学習の時間をより充実したものにしていく。 表現する力を蓄積していけるように各学年で系統的に指導していく必要がある。 テストでは形式にそった記述が求められるので、授業で書く機会には質問にあった書き方なども指導していく。 来年度も読書週間などの機会を活かし、児童の意欲を向上させる読書の啓発活動を続けていく。
学習意欲の向上		<ul style="list-style-type: none"> 授業の展開を工夫し、学習意欲を向上させる。 学習習慣の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の単元指導で、電子黒板、実物投影機等のICT機器を効果的に活用し、学習意欲の向上を図る。 学習の中でペアやグループ学習を活用し、話し合い活動を活発にする授業をすすめる。 指導内容を明確にした授業を展開する。 書くことを意識した授業づくりを行う。 家庭で60分程度でできる宿題を出す。また、休日家庭学習に取り組めるような課題を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器を活用し、児童が課題を想像しやすくする。 話し合い活動を通し、考えを伝える側は、学びが深まり、伝えられる側は自分の考えに自信を持つ。 児童アンケートの「先生は教える方にいろいろ工夫している」で肯定的評価が85%以上になる。 児童アンケートの「家庭学習(宿題を含めて)を60分以上している」の肯定的評価が80%以上になる。 児童アンケートの「宿題を提出している」の肯定的評価が90%以上になる。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 教職員アンケートは肯定評価が88%であった。 グループ学習やペア学習を活用することで少人数で安心して話すことができ、発言の回数が増やすこともできた。 児童アンケートの肯定的な評価は94%であった。 学年ごとに児童に必要な力を考えて、書く時間を設けた授業を実施することができた。 「家庭学習を60分以上している」は73%で、「宿題を提出している」の肯定評価は92%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師間で活用方法を共有し、効果的なICT機器の利用について研修を行っていく。 児童同士の関わり合いを大切に授業づくりを今後も実施していく。 それぞれの教師の授業の工夫を研修会などで共有することで今後も研鑽に努める。 学年ごとの取り組みを研究推進で整理し系統的な指導ができるようにしていく。 特に低学年で60分もの時間は困難と考える。そこで、低学年のから家庭学習の習慣をつけるための「時間」と「内容」を全校で共通理解して取り組む。
	豊かな心・健やかな体	<ul style="list-style-type: none"> 不登校の未然防止を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 欠席連絡のない児童については、始業前後に家庭に連絡を取り、連絡のつかない場合は担任、児童支援教員やその他の教員と連携して家庭訪問を行う。 ケース会議を開き、個に応じた対策を検討する。(別室登校、担任が登校前に家庭訪問する等) いじめアンケートをとり、いじめが原因の不登校を未然防止、早期発見する。 	<ul style="list-style-type: none"> 病欠者を除き、欠席数が30日以上の子を1パーセント以下にする。 保護者アンケートの「子どもは楽しく学校に通っている」、児童アンケートの「学校は楽しい」の肯定的回答が90%以上になる。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 該当児童は1パーセント未満であった。 肯定的な評価は91%だった。今後も今年度の活動を継続する。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭との連絡を大切にし、担任以外の教員とも連携を図ったことで、欠席の多い児童の登校が増えている。引き続き複数の職員で連携をとって対応していく。 個に応じた対応やいじめアンケートの実施により、問題を早期発見し不登校の未然防止が図られた。今年度の取り組みを引き継ぎ次年度も迅速な対応に努める。
<ul style="list-style-type: none"> 自ら進んで体力を向上させようとする児童を育てる。 		<ul style="list-style-type: none"> 体育委員会児童主催の外遊び啓発運動を行う。 体育委員会児童主催の運動大会を行う。 体育大会に向けてリレー練習ができるように練習時間を設けたり、練習ゾーンを設置したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 全児童の外遊びの機会を増やすことを目指し、低学年には遊び方などを含めて特に重点的に啓発を行う。 全学年を対象に長縄大会を2回、ドッチボール大会を1回実施する。 職員に周知し、多くのクラスが活用できるようにする。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 低中高学年にわたって各クラス1回実施した。早い時期での1年生にドッチボールはルールがわかりにくいという課題があった。 年2回の長縄大会を実施でき、大会に向けて目標を立て業間休みや終わりの会後などにもクラスで練習に取り組むことができた。ドッチボール大会も各学年1回実施できた。 体育大会に向けて、多くのクラスが活用できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年に合わせて外遊びの内容を考えていく必要がある。特に低学年は鬼ごっこなど内容を見直していく。 長縄大会では異学年の取り組みを見て意欲を高められるように、大会での観覧スペースの設置などを検討する。 リレー練習の中での走ることを通じて、体力の向上につながるように今後もリレー練習を啓発していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活の中で、体力や運動能力が高まる機会は少なくなっている。外遊びの奨励や運動遊びの中で体力が向上するような取り組みを進めてほしい。 運動好きになる体育授業の工夫も大切だと考える。

開かれ信頼される学校園	学校情報の積極的な発信	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に学校情報を発信する。 授業参観やオープンスクール、学習室参観週間を実施し、保護者や地域の方に普段の授業の様子を公開する。 学校評議員会や学校関係者評価委員会開催時には授業参観を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校ホームページを週1回更新し、学校情報を積極的に発信する。更新は計画表を作成し、見直しをもつて行う。 学校だよりを月4回程度を目標に発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校ホームページを週1回以上更新する。 保護者アンケートの「学校は教育方針や行事、活動などの様子を学校通信やホームページ等を通じて保護者に伝えている」の肯定的回答が90%以上になる。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 年平均、週に4～5回ペースで更新している。 保護者アンケートの肯定的な意見は97%であった。また、保護者アンケートの自由記述でも、肯定的な意見があったので、情報公開の目的は果たしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の授業や行事の様子を発信することができていたことで、来年度も継続して取り組んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページや学校だよりをはじめとする通信により、積極的な情報発信を行っている。これからも継続していくとともに、さらに内容に充実に努めてほしい。
-------------	-------------	---	---	--	---	--	--	--

学校関係者評価総括

- すべての児童の学力向上のために、学習規律や学びに向かう姿勢を身につけていく学校全体として取り組みを徹底することが重要である。
- 今後も不登校傾向の児童が増えないよう、また、いじめの芽を見逃さないよう、安全・安心な学校づくりに努めてほしい。
- ホームページをはじめとして、学校だよりや各種通信による積極的な情報発信は高く評価できる。逆に保護者や地域の声を受信し教育活動に取り組んでいくための連携のあり方が課題である。

次年度に向けた重点的な改善点

- 基礎学力の向上のため、これまでの取り組みを洗い直し、学校全体として取り組みを強化していく。
- 教員の授業力向上、授業改善のため、校内研究と研修の充実に取り組んでいく。
- 仲間づくり集会の取り組みや思いやりのある学級づくりなどを通して、人を大切にする心を育てていく。
- コミュニティ・スクールとして、保護者や地域の声を反映するとともに、情報を共有し、連携・協働による学校づくりを進めていく。

自己評価の基準 A：目標を上回った B：目標どおりに達成できた C：目標をやや下回った D：目標を大きく下回った